こだま俳壇（七月通信句会）

蝉生るここ被爆地と知りて鳴く	田中一男
慰霊の日みたび沖縄汚す罪	後藤貞夫
下駄の行く音の涼しき橋の上	中野みどり
炎天や坂の途中の木のベンチ	白井保次郎
雪渓や針の止まった腕時計	友井眞言
雪渓の溶け込む池の深緑	島田多嘉子
枝豆や土の匂いと青臭さ	柳瀬節子
サングラスとある昭和のスターかな	瀧澤正行
涼風や通す網戸に星宿る	木村武子
翡翠を双眼鏡で射止めたり	高橋和江
車椅子押す力失せ炎天下	中村桂子
大雪渓音立て登る槍ヶ岳	三井光子
雪渓や白馬岳の小屋泊り	坂守
雪渓や濃霧晴れゆきルピナス花	本山文子
涼しげな川音急かす下駄の音	並木まり子
涼しさや仕事を終えて見る月は	小室豊子
炎天下コロナ禍五輪進みおり	角田英昭
雪渓を登りつめるや桜草	常世田芳子
重機音止みて涼しさ戻りけり	松尾佐知子
サングラス日本を暗くして歩く	講師・太田土男